

発行者／伊賀市立上野総合市民病院

三重県伊賀市四十九町831番地 TEL. 0595-24-1111(代表) FAX. 0595-24-2268

<https://www.cgh-iga.jp/>

上野総合市民病院

検索

健診と検診の違いをご存知ですか？

健診センター長 中谷 かなめ

国民健康調査(令和3年厚生労働省)では何らかの傷病で通院されている方は、千人あたり約404人と報告されています。大変多いように思われますが、通院されていない残り6割の方の健康管理はどうされているのでしょうか？このために、健康診断(以下、健診)があります。健診の目的は、病気の早期発見でしたが、心血管疾患(心筋梗塞や脳卒中など)を含めた生活習慣病などを未然に防ぐ予防的な役割も重要視されています。一方、検診は、特定の病気を発見するために行う検査のことで、病気を早期発見し、早期治療につなげることを目的としています。したがって、健診も検診も大切なのです。

日本人の死亡原因の上位であるがんの早期発見のため、がん検診が重要であると考えられています。国民生活基礎調査(令和4年)では、がん検診受診率は、胃がん(過去2年間男性53.7%、女性43.5%)、大腸がん(男性49.1%、女性42.8%)、肺がん(男性53.2%、女性46.4%)、乳がん(女性47.4%)、子宮頸がん(女性43.6%)と報告されています。三重県における胃がん、大腸がん、肺がんの受診率は全国平均に達していません。乳がん、子宮頸がん受診率はいずれも50%強と全国平均を上回っていますが、米国では80%以上であることを考えると十分ではありません。平成16年から国の方針で自治体での子宮頸がん検診は20歳以上が対象になっていますので、婦人科検診もお忘れのないようお願いします。

我が国の「第4期がん対策推進基本計画(令和5年)」において、がん検診受診率60%以上が目標の一つに掲げられていますので、ぜひともご協力いただくようお願い致します。

がんに限らず、健康を維持し楽しく豊かな生活をおくれるよう、是非、健診・検診をご活用ください。

図5 主な死因の構成割合(令和2年(2020))

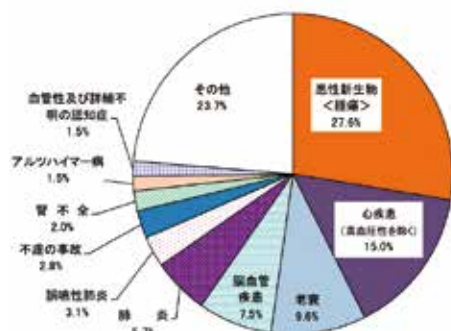
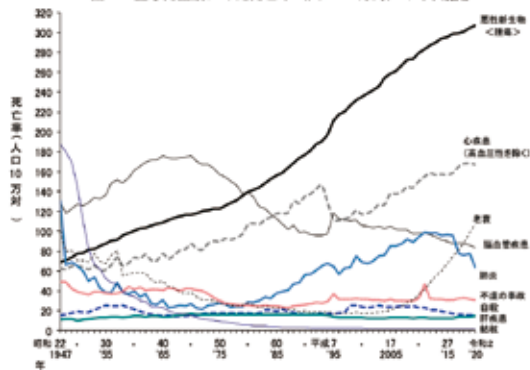


図6 主な死因別にみた死亡率(人口10万対)の年次推移



令和2年(2020) 人口動態統計月報年計(概数)より

職員の声 令和5年度入職

5階看護師 かま い 釜井 あや 彩

入職して約1年が経ちました。私が配属されている病棟では化学療法を受ける患者さんや終末期の患者さんが入院しています。身体的苦痛に加えて精神的なケアも必要な中で、コミュニケーションを図り、患者さんに寄り添うことが大切であると考えます。まだまだ分からないことが沢山ありますが、プリセプター(指導担当 先輩看護師)や新人教育担当の方をはじめ病棟スタッフの方々が手厚く指導してくださり、日々学びを深めることができます。わからないことや不安なことについて質問をすると、私の理解度を把握して、丁寧に教えてくださいます。



入職当初は点滴・採血など、痛みを伴う看護技術に戸惑うことも多くありました。しかし、患者さんから「痛くなかったよ」と言われた時はとてもうれしかったです。また、「いつもありがとう。これからも頑張ってるね」という言葉がとても励みになり、やりがいを感じています。

今後はより一層看護技術の向上に努め、患者さん1人ひとりに寄り添えるよう、精進していきたいと思っています。

介護福祉士 ふくなが ももこ 福永 桃子



医療現場で働く介護福祉士に興味を持ち入職してから1年が経ちました。

入職間もない頃は、施設と違う環境に戸惑うこともありましたが、プリセプター(指導担当 先輩介護福祉士)や先輩方、看護師の皆さんに丁寧に指導していただきました。振り返ってみると、先輩方に支えられ様々なことを学ばせていただいた1年でした。

介護福祉士の仕事は排泄・入浴介助、環境整備、ベッドメイク、検査の送迎などです。患者さんとコミュニケーションを図る機会が多いので、言葉掛けや笑顔を大切にしています。住み慣れた環境と異なる入院生活で、少しでも安心して治療を受けていただけるよう、身の回りのサポートを日々支援できたらと思います。

入院された時は歩くことも難しかった患者さんが、元気に晴れやかな表情で退院されていく姿が印象に残っています。患者さんに「ありがとう」と言われた時、この仕事をしていて本当に良かったなと嬉しい気持ちになり、やりがいを感じます。

これからも介護福祉士の仕事に誇りを持ち日々精進していきたいです。

臨床検査課 とらたに うい 虎谷 美舞

臨床検査技師として4月から勤務し、さまざまな経験を積むことができました。現在、私は心電図や呼吸機能、脳波や採血などを担当しています。患者さんが少しでも安心して検査を受けていただけるように目配り、気配り、こころ配りを忘れずに業務に取り組んでいます。患者さんに「ありがとう。あなたでよかった。」と言っていたときは嬉しく、やりがいを感じます。



また、技術面でつまづいたときは先輩方に優しく指導していただいています。習得するまで苦労すること多いですが、新しい技術を学ぶことが自分の成長につながると思うととても楽しいです。

患者さんに寄り添いつつ、適切な検査を行うことで少しでも元気になっていただけるような手助けができるよう、日々努力していきたいです。

放射線技術課 ^{はやし} 林 ^{だい や} 大也



入職後、約1年が経ちました。現在、レントゲン撮影やCT撮影を行っています。入職したばかりの頃は分からないことだらけでしたが、先輩方から熱心に指導していただき、徐々にできることが増え、やりがいを感じながら日々業務に励んでいます。

信頼される診療放射線技師になるために、先輩方の知識・技術をどんどん吸収していきたいです。診療放射線技師は担当する検査で、患者さんとコミュニケーションを取る機会も多いですが、『相手に分かりやすく伝える』ということの難しさを感じる場面もあります。そのような場面で分かりやすく、その患者さんに合った伝え方や接遇ができるように努力しています。

まだまだ勉強することが多いので、日々学び、成長していきたいです。知識や技術はもちろんですが、患者さんに寄り添った接遇も身に着け、スタッフからも患者さんからも信頼される診療放射線技師を目指して精進したいと思います。

リハビリテーション課 ^{むらて な なみ} 村手 那奈美

昨年4月からリハビリテーション課で作業療法士をしています。

当院の入院患者さんや外来で来られる患者さんが安心して生活を送れるよう、日々リハビリを担当させていただいています。リハビリの内容としては、患者さんの退院後の生活を見据えた生活動作の練習だけでなく、介護用品の検討なども行なっています。



退院に向けてリハビリを進める上で、動作練習だけでなく、患者さんの悩みの聞き取りや住宅環境・生活環境を知ることがとても重要になります。実際に働いてみて、1人ひとりの患者さんで生活や価値観が全く違うということを肌で感じました。そのため、固定観念にとらわれず目の前の患者さんと向き合い、安心した生活を送っていただける方法を考えていく大切さを改めて感じました。

今年の4月で2年目になりますが、リハビリテーションの知識を深めるだけでなく患者さんや他職種のスタッフとのコミュニケーションを絶やさず、より良い支援を行えるよう努めていきたいと思っています。



令和6年能登半島地震被災地へDMATを派遣

令和6年1月1日に発生した石川県能登半島地方を震源とする地震に関し、三重県DMAT(*)調整本部からの派遣要請を受け、当院からDMATを、石川県に派遣しました。

活動期間

- ①令和6年1月10日(水)～13日(土)
- ②令和6年1月29日(月)～2月2日(金)

活動拠点場所

- ①石川県立中央病院(石川県災害拠点病院)
- ②輪島市役所内輪島市保健医療福祉調整本部

派遣メンバー

医師1名、看護師1名、薬剤師1名、事務員1名
又は臨床検査技師1名の4名の編成チーム

主な活動内容

- ・活動拠点本部における情報収集・連絡等の活動
- ・患者転院搬送業務
- ・施設での医療介入の要否判断等



活動の記録

1月10日からの石川県立中央病院(DMAT活動拠点本部)への派遣では、自衛隊ヘリで能登半島から搬送された患者を、石川県白山市内にある医療機関へ搬送する業務に従事しました。また、DMAT活動拠点本部において、患者搬送調整担当として、自衛隊ヘリやDMAT車両、バス等で搬送された患者の転院先を調整する業務に従事しました。

1月29日からの輪島市保健医療福祉調整本部への派遣では、福祉施設班に配属され、割り当てられた高齢者施設や障がい者支援施設を訪問し、その施設に医療介入が必要かどうかの判断、ライフラインや必要な物資の確認を行うとともに、施設入所者の褥瘡^{じよくそう}の処置等も行いました。また、門前地区内の避難所から施設への患者搬送や保健医療福祉調整本部内での情報収集、リハビリチームや精神医療チームとの調整なども行いました。



当院では、要請に応じ、今後も継続した支援活動を行っていきます。被災された方々の生活が1日でも早く穏やかなものとなりますよう、職員一同心よりお祈り申し上げます。

(*)^{ディーマツト}DMATとは

災害派遣医療チーム(Disaster Medical Assistance Team)の頭文字です。

医師、看護師、その他の医療技術職員及び事務職員などで構成され、大規模災害や多数の傷病者が発生した事故などの現場において、急性期(おおむね48時間)に活動できる、機動性を持った専門的な訓練を受けた医療チームのことです。